2010年(平成22年)
第31号
(7月15日)

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

アームズダウンの署名数１１万人を突破（６月末現在）

■８月には目標突破を

１５万人の署名を目標としている京都教会であるが、６月末までの累計が１１万人を突破した。６月はほぼ毎日、清水寺での署名が行われたこと、それ以外に東寺や東福寺などでの署名が行われたこと、宗教界を中心に各界からの協力をいただいたこと、そして、会員一人ひとりが日々歩いて個別に署名を求めたことなどが功を奏した。

アームズダウンのキャンペーン期間は、９月２５日まで。京都教会実行委員会では、８月には目標を突破し、それを上回る署名を集めるようにしたいと考えている。（写真：東寺での署名）

■浄土真宗本願寺派の大谷光真門主猊下も署名

７月１日、浄土真宗本願寺派の大谷光真門主猊下が、アームズダウン・キャンペーンに署名された。

浄土真宗本願寺派とは、親鸞聖人を宗祖として、浄土真宗の教義をひろめ、法要儀式を行い、僧侶、寺族及び門徒その他の信者を教化育成し、他力信仰の本義の開顕（かいけん）に努め、人類永遠の福祉に貢献されることを目的とされている。

４０年前、京都で開催された第１回ＷＣＲＰ世界大会において、浄土真宗本願寺派の第２３世ご門主の大谷光照猊下が、名誉総裁として開会の挨拶をされた。

最近では、一昨年７月札幌の「平和のために提言する世界宗教者会議」で、大谷光真門主猊下は、名誉議長として基調講演をされた背景がある。（ARMS　DOWN!公式サイトより）

（大谷門主猊下による署名）

「一食」啓発に自動販売機も一役　＜６月６日付『佼成新聞』より＞

６月１日から、大聖堂はじめ本部諸施設に設置されている自動販売機での飲食物の購入を通して「一食（いちじき）ユニセフ募金」に協力できるようになった。「一食を捧（ささ）げる運動」の推進の一環として実施されるもので、購入金額から１０円分が献金される。現在、設置中の全６９台が対象になる。

自動販売機の前面には、ユニセフと同運動のロゴマークの入った広告が掲示される。また、携帯電話で同運動のサイト内にある「一食ユニセフ募金」のページにアクセスできるＱＲコードも添付。同募金の意義や歴史について理解を深められるようにも工夫されている。

本来は、一食を抜いて、その食費の代金を、同悲同苦の精神で、募金しようとするものだ。ジュースを飲んで、その代金の一部を募金するというのに抵抗感を感じる人もあるという。

しかし、この「一食自販機」が全国に広がることで、同運動のＰＲに役立ち、利用者による募金への協力が広がるようになってもらいたい。

時事刻々

七月の京都は祇園祭で染まる。十七日の山鉾巡行を中心に一か月にわたる長い祭りだ。

京都教会青年部では、二十三年前から祇園祭の鉾曳きボランティアに参加している。この鉾曳きに見られるように、祇園祭は“動”の祭りだと言える。

京都市内では年中、地域のまつりが盛んにおこなわれている。まつりを大切にするのは、人々のコミュニケーションや地域の活性化に欠かせないからだろう。

八月六日から十五日にかけて、堀川と鴨川を中心に「京の七夕」が行われる。年に一度織姫と彦星が出会うことから、出会いを大切にした新しいまつりだ。夕暮れから辻々をライトアップし、幻想的な“静”の雰囲気を演出する。

まつりと「政（まつりごと）」は源が同じ。先日選ばれた議員の方々には、動と静を活かして、国民のためになる政治をしてほしいものだ。

ユニセフ街頭募金に１３万円

７月４日、京都教会青年部は、四条河原町と新京極六角において、ユニセフ街頭募金を実施した。この日は、教会の日曜参拝日で、午前中の式典で「ユニセフ活動」のビデオを見て、世界の子どもたちの現状を学んだ。

心配された天候も、晴天に恵まれ、午後１時過ぎ、街頭募金箇所に青年や少年たちが出発した。２時間ほどの募金だったが、老若男女が列をなし、元気な声で通る人に呼びかけ（右写真）、130，624 円の募金が集まった。

このユニセフ街頭募金は、毎年５月の第３日曜日（青年の日）に実施されている。全国の青少年が同時に募金活動を行い、市民の協力に呼びかけて、世界の恵まれない子どもたちに救いの手を差し伸べる活動だ。今年はアームズダウンに注力したため、７月に実施された。

集まった募金は、日本ユニセフ協会に送られ、ユニセフの諸活動に役立てられる。

子どもたちに夢ある未来を　ゆめポッケキャンペーン展開中！

６月１日からスタートした「ゆめポッケキャンペーン」も終盤にさしかかった。京都教会では、婦人部と少年部が中心となり、家庭で親子が世界には今も紛争や対立で、家族や友達を亡くし、今も深い悲しみを抱えた子供たちがいることを語り合い、心に傷を負った子供たちにおもちゃや文房具と共に思いやりや真心を送ろうと取り組んでいる。

７月２４日、こうして用意した手づくりの「ゆめポッケ」の発送式が行われる。各家庭で作成したポッケを集め、仏さまの前で真心が届くようにと祈願して、本部に送付される。

７月２０日まで、ポッケに詰め込むものを受け付けている。

「ポッケを受け取った子どもたちの声」

★ポッケを家に持ち帰ると、家族みんなが喜んで、幸せだねって話したんだ。僕のことを思ってくれる人がいる、そのことがとてもうれしかった。いつか、メッセージカードに写っている友達に会いたい（アリ・モハマド・ジュマ君・１０歳）

★日本のお友達がポッケを作ってくれたと知り、心から感謝しています。ポッケに入っていたぬいぐるみがすごくうれしかった。将来はコンピューターを扱う仕事に就いて家族を支えていきたい。そのために、今はきちんと勉強します。皆さんからのプレゼント、大切にします（ジョヴィ・マ・デリマちゃん・１２歳）

といった声が数多く寄せられている。

私たち kinki.元気　～京都教会の記事より～

６月６日の日曜参拝日に行われたミニ説法ではＡＲＭＳ　ＤＯＷＮの署名活動を取り組む中で得た心の喜びを６人の方が発表して下さいました。それぞれの方の内容を掲載します。ぜひご覧になって下さい。きっと、共感し、勇気付けられ、感動して頂けると思います。

パソコンでのアドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/
携帯からは右のＵＲコードでアクセスできます！

今月は「他教団活動紹介」はお休みです。

エコキャップ回収状況　　６月末現在　**１３，２００**個　（ワクチン**１６．５**人分）

分類	個人・企業・団体名	営業所・支店・他	所在地		累積収集数	回収最終日
37670 宗教団体	ら 立正佼成会	京都教会	京都府	京都市東山区東町	13,200	2010/06/03

６月末現在、立正佼成会ではエコキャップ運動に３３の教会が参加している。回収したキャップの総数は、約１，０１４万個で１２，６７５人分のワクチンに相当する。京都教会ではスタートして間がないため、まだ少数ではあるが、その小さな積み重ねが大きく役立つように継続したい。

ブロック！地球温暖化　身近な取り組みを考えよう

行動１．紙を無駄に使用していませんか？
サラリーマンが一ヶ月の平均使用枚数は 1000 枚。
社内文書はすべて裏紙を使用してはどうか。

行動２．電気を消し忘れていませんか？
自宅ではできている人でも、会社の事務所などの電気は自由に使っていませんか？要チェック！

行動３．外食先で食べ残ししていませんか？
外食産業界が排出する食品ゴミ量は年間９００万トン。食糧自給率が低いのに、食料の廃棄は世界１。仏教の少欲知足の精神で、ムダをなくそう！

佼成会のことば（行法ガイドブックより）

●お任せする（才覚無益）

法座で「くよくよ考えないで、あとは仏さまにお任せしなさい」と指導されることがあります。「お任せする」という言葉には仏さまに対して絶対の信を置くという精神が込められています。信じているからこそ精一杯努力して、結果は仏さまにお任せする心になれるのです。

しかし、お任せする気持ちになるには時間がかかり、最初は不安になることがあります。どうしても自分の力で問題を解決しようとするのが、一般的ではないでしょうか。そして、自己流にもがいて問題をますますこじらせ、解決しないということがよくあります。

自分の力などたかが知れています。しかも、それは条件や縁によって左右されやすく、ことあるごとに結果を見て、一喜一憂するものです。

よく「才覚無益」といわれます。「才覚」とは人間の浅知恵ですから、仏の智慧から見れば本当に小さなものです。仏さまにお任せすることができれば、不思議な働きがいただけるのです。

だからといって、お任せするだけで、自分はなんの努力もしなくていいのかというと、そんなことはありません。自分のことは忘れて、人さまが幸せになるように一心に布教に歩いているうちに、気がつくと問題も解決の方向に向かっていたという体験を多くの人が持っています。「人事を尽くして天命を待つ」というように、「お任せする」ということも、努力のあるところに救われがあるのです。その努力も自己流でなく、仏の智慧に基づいた努力でなければなりません。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《みんな仏になれる・・・一仏乗》
一仏乗というのは、結局〈すべての教えが一切衆生を仏の境地へ導くための教えである〉ということです。

庭野開祖は「自分が生かされているのは何のためかという問いのないところに、正しい信仰は生まれない」と言われてました。それでは、私たちが生かされ生きているのは何のためなのでしょうか。それは、仏になるためです。

人間が生きていくなかには、喜びだけでなく、必ず苦しいことや悲しいこと、辛いことがあります。けれども、それは決して「悪いこと」ではありません。それは私たちが仏になるために、みんな必要なことなのです。私たちは**「みんな仏になれる」**と決まっていて「誰もが仏になる道を歩んでいる」のです。同じ出来事一つを見ても、それを○と見るか、×と見るか、その見方、考え方の違いが、その人の相(すがた)にも、日常の生活にも現れてくるのです。

「神さま、仏さまを信じて『いつもそばに仏さまがついていて下さる、神さまがご守護下さっている』と、こう思っておれば、いつでもまじめに、悠々といけるわけです。このことが、信仰ではいちばん大事なんですね」と、庭野開祖は言われてました。

私たちは、常識的な幸せの形を求め、それにとらわれて、苦を解決しようと悩み苦しみますが、その苦のなかでいかにして喜びの心、感謝の心を見つけていけるか。それが幸せへの分かれ目です。

いついかなる状態の中にも功徳を発見できる、そんな仏さまの智慧を磨いていくことが、私たちがいま生かされている最大の目的であり、そこに焦点をあてていくことが、修行なのです。自分の心がそのように変わり、心が定まれば、すべてそこから変化していきます。そして悲しみ、苦しみの多い人生も、安心して生きていけるようになるのです。

「この人は仏になれるけれども、あの人はなれない」「あんな修行じゃ救われない」ということはありません。こちらの見方によって、見る眼を持ちさえすれば、誰もが仏になる道を歩んでいる人であり、誰もが仏さまであることが見えてくるのです。方便品にある**「一人として成仏せずということなけん」**とは、そういう意味なのです。

本仏を信じてその教えを実践しようとする人は、見聞すること経験することのすべての中に、本仏の姿を見、その説法を聞くことができるのです。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《迷わずにこの道を行け》

1979年、宗教界のノーベル賞といわれる「テンプルトン賞」を受賞した翌年、もう一つ会員の喜びが重なった。国際自由宗教連盟（ＩＡＲＦ）の編集委員会が、〝アフリカの聖者〟といわれたシュバイツァー博士の生誕百年を記念して、博士のご家族の協力を得て設けた「ユニクエスト・シュバイツァー賞」の第一回受賞者に、庭野開祖が選ばれたのである。

シュバイツァー博士は、アフリカの奥地に病院を建てて病気に苦しむ現地の人を救う医療に生涯を捧げられた聖者だ。その名にちなむシュバイツァー賞は、宗教者の平和への献身に対して与えられるものである。

立正佼成会の会員は、全国各地での地域への奉仕や、東南アジアの貧困に苦しむ人々への援助物資を送るなど、無私の奉仕を続けている。その活動がさらに発展して、市民の善意を集めてバングラディシュに井戸を掘り、インドでは病院を建設し、フィリピンやインドネシアに職業訓練校を作り、タイ、カンボジア国境に医療団を派遣し、ネパールで農業指導を行い、ケニアのトルカナ地方への食料援助など、奉仕活動の輪は大きく世界に広がっている。

その一人ひとりの奉仕活動を、ちゃんと見守って下さる方々がおられるのである。このたびのテンプルトン賞の受賞にしても、**「仏教の生活化を一人でも多くの人に」**と、懸命に取り組んでいる立正佼成会の会員と、平和のための宗教協力を進めていこうとする世界宗教者平和会議の同志の献身を世界の人びとが認めて下さった、その受賞にほかならないのだった。その多くの人たちの代表として、庭野開祖は授賞式に列席した。

昭和５４年９月、授賞式はロンドン郊外のウィンザー城で行われた。テムズ河畔にそびえるこの城は、九百年にわたって英国歴代の国王が居城としてきたものだという。「緑の貴賓室」と呼ばれる美しい部屋で行われた授賞式は、テンプルトン氏夫妻や、世界的バイオリニストのメニューヒン氏らが臨席するなか、エリザベス女王の夫君エジンバラ公から、賞状と記念メダル、そして副賞八万ポンドの小切手が手渡された。「ちゃんと小切手は入っているだろうね」と、冗談を言って封筒を透かしてみるしぐさをされるエジンバラ公は、いかにもきさくな方という印象だった。

「第七回のテンプルトン賞を始めて仏教徒にお渡しすることができて、本当に嬉しく思います」と手を差し伸べられ、立正佼成会について、色々と質問をされる。とりわけ新宗教教団である立正佼成会が既成の宗教教団と宗教協力を進めていることに、エジンバラ公は関心を持たれているようだった。**「キリスト教も宗教協力の精神を仏教に学ばなくてはなりませんね」**と、にこやかにおっしゃられる。側近から聞かれているのだろうか、本会の事を驚くほどよくご存知だった。

このテンプルトン賞の授賞式には直子夫人も出席され、しみじみとした口調でこう言われた「本当に会長先生の言ったとおりになりましたね。これが、『善哉、善哉』という仏さまの声なのですね」。会の創立当初、直子夫人が「お父さん、いつになったら信仰をやめるのですか」と、よく尋ねたことがあった。

庭野開祖は**「お経文に空中から『善哉、善哉』という仏さまの声が聞こえてくると説かれているが、それが聞こえるまでは信仰をやめないよ」**と答えた。すっかり忘れていたが、直子夫人の言葉で「ああ、そんなこともあったなあ」と、思わずほほえみが口許に浮かんだのであった。

授賞式の２日後、ロンドン市内のギルドホールで、受賞記念講演が開かれた。庭野開祖は、欧米の著名な宗教学者など千人を超える聴衆を前にして、仏教の教えの要である「三法印」の法門を中心に講演を行った。「この世界の一切の存在は、他とつながりあい、一瞬一瞬に変化しながら生滅をくり返しているというのが仏教の縁起の教えです。自分が他によって支えられ、生かされていることを知ったら、世界共同体建設のために自分を捧げることこそが人間の最大の務めであると、誰もが自覚せずにいられないはずです。今回のテンプルトン賞受賞は、**神仏が『迷わずにこの道を行け』とお示し下さったものと**、私は受け止めているのです」

そう講演を結ぶと、聴衆が全員立ち上がって温かい拍手を送って下さった。そのあと、ベルギーの元首相チンダーマン氏が壇上にのぼり**「巨大な樫の木も、もとは小さなドングリであったように、庭野氏のこれまでの歩みは、我々に勇気を与え、励ましてくれます」**と挨拶をされた。

(つづく)

渉外部からのメッセージ

ＮＨＫの大河ドラマ「龍馬伝」が人気のようです。物語の描き方には賛否あるようですが、約１５０年前、日本はあのような歴史を刻んでいたことには間違いありません。当時、アメリカはすでに国民の一票で大統領を選ぶ社会の仕組みが出来ていたわけです。多くの若者が日本を良くしたいと血を流して国の根本を作ってくれました。今回の選挙は志士たちの血のにじむ努力の上にある。自分の一票を大事にしたいものです。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK京都教会　FAX 075-762-2266